令和５年度　上越市立有田小学校　第１回学校運営協議会　議事録

令和５年７月１４日（金）１５：００～１６：３０　於：有田小学校会議室

＜次第＞　　進行:教頭

０　開会に先立ち、７月７日にご逝去された委員に黙祷が捧げられた。

１　開会のあいさつ（副会長）　略

２　学校長あいさつ（校長）

まず、子どもたちの命を最優先に取り組んでいる。自然災害への対応はもちろん、交通安全に関しても、飛び出しなどの危険行為の情報が寄せられた際には、即時の指導を行っている。命あっての教育である。地域の皆様には見守りに感謝すると共に、何かあったら声を寄せていただきたい。

子どもたちだが、大きく変わってきている。やはりコロナが明けて５類扱いとなり、マスクも外れて活動的になってきていると感じる。そのため、地域の皆様からお寄せいただくような危険な遊びも散見されるようになってきたのだが、子ども本来の姿に戻ってきたとも言える。また、子どもたちの運動量やかかわりも増えたことに伴ってトラブルも増え、ケガも増えている。現在も養護教諭が子どものケガで医者に同行しているが、縄跳びを引っ張り合っているうちに手が離れ、持ち手が歯に当たったというケガであり、子どもたちのかかわりが増えれば、その分、事故も増えるということだと考えている。

命を最優先にしながらも、大切にしているのが「人間関係づくり」である。世の中が劇的に変化しており、勉強だけできても、大人になったときには上手くやっていけないと強く感じている。特にＡＩの進歩は目覚ましく、Ｃｈａｔを用いればおおよその答えが分かるようになっている。つまり、単に知識を覚えているということだけならばＡＩの方が優れており、日本語で質問したことへの回答を日本語で返すだけでなく、簡単に英語やフランス語といった外国語に変換することもできる…といったことからも、覚えるよりもＡＩを使いこなした方がきっと早い。そうすると大事なことは、自分のやりたいことが明確になっているかということ。意志や志がなければＡＩを使う必要性もない。さらに言うならば、意志や志をしっかりもっているならば、ＡＩを使って外国人とつながったり、よりよいものを作りだしたりすることができる可能性が広がったとも言える。まず、人とつながりたい、自分でもっとやりたいという気持ちを高めていきたいと考えている。

引き続き、当校で目指していることを説明させていただきたい。資料３ページのグランドデザインをご覧いただくとともに、その前にある令和４年度スクールマネジメント報告書は昨年度の取組を示してあるので、こちらも参照いただきたい。

教育目標は「あたたかく、理想は高く、たくましく」であり、最重要課題は「豊かな人間性・社会性の育成」である。この、「社会性の育成」は創立当初から継続しており、理由は次の３点である。まず、統合したことにより新しい人間関係を築かなくてはならないこと、あわせて、大規模校となったことで様々な軋轢も予測されたこと、そして、大人になったときも社会とのかかわりを持ち続けていくことが大切であること。これらのことから継続して掲げている。

昨年と変わったところは副題で「自己受容・他者信頼・他者貢献」とした。昨年までは「自己肯定感」

などであったが、この３つが社会性の育成に重要であると考えており、最重要課題に掲げることで職員が一致して取り組むことができると考えた。これはアドラー心理学の知見を取り入れたもので、同様の取組を行っている方々も、この３つを大切にしている。「自己受容」とは、自分はありのままの自分でよいということである。できないことや上手くいかないことがあると自分が嫌いになり、努力できなくなることも多いのだが、自分はありのままでよい、生きているだけで素晴らしい、周りの人からも自分は愛されていると感じられることが大切だと考えている。次に、「他者信頼」とは、周りの人は敵ではなく、あなたを大切にしてくれる人だということ。受け入れてもらえるのだということを感得させたい。そうでなくて、周りの人は敵ばかりだ…となると社会には出ていけない。これはお互いにそうならないと他者信頼は生まれない。学級を例に挙げると、何か意見を述べた際に受け入れてもらえれば、さらに発言し自分が出せる。しかし、受け入れてもらえなければ、発言することはできなくなり自分も出せなくなる…学級の中でさえ自分を出せなければ、社会でも同じであるだろう。だから、他者信頼は大事であると考えている。そして、「他者貢献」については、究極的な問いとして「人はどんなときに幸せな気持ちになるのか？」を考えたときに、自分だけがおいしいものを食べ、自分だけがお金持ちになれば幸せか…と言えば、そのようなことはない。一緒にいる人と喜びを共有できたり、他人のために何かをして感謝されたりしたときに、幸せを感じるのだと考える。そもそも、社会に生きるとは、他人と共に生きることであり、互いに助け合って生きることであるのだから、自分は他人のために何かができると思えることが幸せになれるかどうかにつながり、世の中で生きていくために重要と考えている。故に、この３つが学校教育で育まれるようにしていきたい。

その下は「知・徳・体」にあたり、方策もほとんど変えていない。ただし、職員にはそれぞれをバラバラに取り組むと社会性育成にはつながらなくなると伝えている。例えば、学力向上だけを追求すると「勉強だけができればよい」となり、それは個人の問題となる。他の人はできていなくても自分だけができているからよいとなり、つながりは生まれない。絶えず、皆でできるように、皆で助け合って…を意識するようにお願いしている。これらは学校だけでできることではなく、家庭や地域にも呼び掛けて、共に育てていければと考えている。

昨年度との大きな違いは、次ページにある「月別なかよし目標」である。昨年度の席上でもねらいを絞って取り組みたいとお話ししたかと思う。多くの学校では「月別生活目標」として取り組まれているものであり、「あいさつ」や「時間を守ろう」など、大人になったときに身に付いていてほしいことを月毎に掲げることが多い。これを有田小では、とにかく人間関係が良好になるように、友達と良い関係を築けるように、保護者や地域の方とも関わっていけるように、世の中に出たときには誰とでも仲良くできるようにと、仲良くできるために必要なこと４つに絞り、繰り返し学ぶ仕組みとした。これくらい徹底しないと変わらないと思っており、他校での実践例を聞いたとことがない。おそらくは、全国初の取組だと思う。内容としては、４月は「あいさつを伝え合おう」。あくまでも「伝え合おう」を意識して、お互いにあいさつをすることに取り組む。５月は「温かい言葉を伝え合おう」。子どもたちの実態として否定的な言葉が多い。そういう言葉をなくし、失敗しても大丈夫だよといった言葉に変えていかないと、先に述べたことにはつながらないと考えている。６月は「よいところを伝え合おう」。ここで気を付けたいことが、よいところというのが、勉強やスポーツなど、できたことだけになるとこれは良くない。そうでなく、困っている時に寄り添ってくれたとか、助けてくれたとか、一緒にいるだけで幸せとか…そういうことに気付いてほしいと願っている。７月は「ありがとうを伝え合おう」。日常生活

において自然に「ありがとう」という言葉が出てくるようにしたい。そうすると誰からも愛される子になる。これがお互いに言えるならば子ども同士の関係性はよいということになり、親に対してもそうであるだろう。当たり前だと思ってしまうと「ありがとう」という言葉は出てこなくなるので、なおさら「ありがとう」が言える子にしたいと考えている。これを学期ごとに繰り返すことで、そのような言葉を使えるようにしたいし、既に使っているという子どもは、相手に伝わるように、相手の心に響くようになっていってほしいと願う。単純に言えるだけでなく、心から言えるようになることができれば、上手に人と付き合うとことにつながるし、自己実現にもつながるのではと考えている。

なお、これは先生方だけが頑張っても仕方がないことであり、子どもたちも全校に働き掛ける取組をしている。あいさつについては、先月は３年生が、ＰＲ動画を取って公開して、がんばりが双六状に見えるように工夫して取り組んだ。

これらは、自分の言葉を変えていくことになり、素直には受け入れられない子どももいる。しかし、強引にやれやれではなく、大事だなということに気付かせたいと願っている。子どもたちのあいさつは安定して大きな声であいさつできるようになってきた。ことばも変わってきているなと感じている。５・６年生は、自然教室で５年生が協力的な姿を見せてくれたし、修学旅行で６年生が仲良く、大きなトラブルもなかった。塞ぎこんでしまった子もいたのだが、その子を助けようと声を掛ける姿もあった。１・２年生は、大きな声で元気なあいさつができるようになってきている。低学年は素直に受け入れることができるからだろう。３・４年生は、ギャングエイジであり腕白である。これは悪いことでなく、人間関係を結ぶために友達とぶつかり合っているのだと捉えている。エネルギーのある子たちであり、今後、大きく成長していくのではないかと感じている。

３　報告・協議

Ａ　氏：授業を見たが、とても落ち着いている。担任不在のため、学年主任が２学級を一緒に授業している１年生約５０人も、授業力が高いからかとても落ち着いており、これが１年生かと驚いた。統合前の春日新田小は８００人で、校舎も狭かったこともあり、大変賑やかな印象を受けた。有田小は校舎も大きくゆったりとしており環境もよい。全体的に落ち着いていて素晴らしい。

Ｂ　氏：地域の子どもが話してくれたのだが、修学旅行で特に温泉が楽しかったとのこと。今の子どもは水着を着てプールに入る経験しかないと思っていたのだが、今の子どもでも温泉を楽しめることに驚くとともに感動した。今どきの子どもは、水着を着ないと温泉などには入れないとの話を聞くことがあるのだが…？

校　長：他校ではそのような例もあると聞いたことがあり、肌を見せられない子どももいる。修学旅行の様子を見る限りだが、この学年の男子ではそのようなことはないようだ。

Ｂ　氏：修学旅行をとても楽しんできたようだ。唯一の不満は部屋が小さかったこと…と話していたが、６人１部屋だったというし、だからこそ楽しかったでしょ？と話すと、それもそうだと笑っていた。また、いつもアサガオに水やりをしている１年生が、学年主任の仕掛けだと思うのだが大きな声でいってらっしゃいとバス３台を見送る「いってらっしゃいセレモニー」をしていたことも、これは善いことだと心が温まる思いだった。

Ｃ　氏：「温かい言葉」「よいところを見付けよう」というのは昭和の世代からすると隔世の感もあるが、これにより傷付く子どもが減るということはよいことだとは思う。あわせて、心の耐性という

ことから考えるところもある。絶対に叱らないという気持ちで諭すということなのだろうが、諭すということが一番難しい。子どもたちがいけないことをしたときについては、どのように考えているか？

校　長：学級づくりに関係するものと考えており、４月当初に先生方に話したのは、担任により大きく２つのパターンに分かれるということ。子どもたちの集団作りをして、その上でルール作りをするパターンと、厳しく指導してルールを作ってから子どもたちの集団作りをするパターンの２つ。どちらにも長所短所があるのだが、当校の現状として、どうしてもルールを守れない、友達付き合いが上手くいかない、学習にしっかりと向き合えない…というお子さんが多くて、叱ることを優先すると毎日毎日叱られ続ける子どもが出てしまう。そして、４月・５月と先生から叱られ続けることで、その頃には先生との関係が回復不可能なほどに悪くなってしまう。さらに、先生から叱られ続けるその子は「悪い子」になってしまうので、周りからも注意され続けることになり、居場所がなくなって学級に入れなくなってしまう。そこで、４月・５月はルールがしっかりしていないと授業が大変なのは分かるが、それよりも子どもたち全員が学級で認められている、先生に大切にされていると感じられることを優先してほしいとお願いした。人間関係がしっかりとできてきているのであれば、そろそろ「叱る」ということもできるようになってほしいし、学校はできないことに取り組む場所であるので、苦しくても頑張ろうよと言える関係にしたいところだ。

教　頭：私たちは大人であっても間違える生き物であり、子どもたちはそれこそ毎日間違えたり、失敗したりする。そこで、子どもたちには「本当はどうしたかったのか？」を問うようにしている。相手に関わりたくて、それこそ嫌がらせのような形で関わってしまう子もいる。そんな時こそ「本当はどうしたかったの？」「そのためにはどうしたらよかったの？」と一緒に考えるようにしている。それこそ子どもですから、上手く行かずに二度、三度と繰り返すこともしばしば。でも、我々は粘り強く言い続けるしかない。二度でだめなら三度。十度でだめなら十一度と。そのような気持ちで臨んでいる。

校　長：先に委員から話のあった２学級が合同で授業を受けている件についてだが、学級担任が病休に入っている。私も同行して受診したが体調不良は如何ともし難く、９月末まで延長となった。そのため、学年主任が２学級を合同で指導する場合もあるのだが、その力量もさることながら、今年度の１年生は学年主任主導でスタートプランに４月、５月と取り組んできたことが大きい。このスタートプランというのは、１年生は入学に伴って保育園から生活が大きく変化するが、それをスムーズにするための取組として、朝からの流れを一緒に確認したり、先生となかよしと称して私も含め多くの先生方と交流したり、授業についてもその進め方やルールをそれこそ褒めて褒めて定着するようにしてきた。だからこそ、５０人であっても話を聞こうとするし、みんなで頑張ろうとしているのだと思う。ただし、学年主任の負担は非常に大きく、級外職員が支援に入ったり、県教委に大変な状況を伝えて上越教育事務所から支援に来ていただいたりしている。そのような状況だが、１年生は明るく学校生活に慣れて来ていて、ここまで順調に来ていると捉えている。保護者の皆様の理解もあり、２つの学級が一緒に学習していることへの批判も現在のところはいただいていない。

Ｃ　氏：なるほど。そういうことだったのか。それこそ、我々の時代の中学１年生のようでもあった。

Ａ　氏：孫がＩ年生にいるが、学年主任のことを大好きだと言う。信頼しているのだろう。
Ｂ　氏：それは素晴らしいことだ。
Ｃ　氏：と、いうことは常に多目的室で一緒に過ごしているのか？
教　頭：国語と算数については、どうしても学年主任の力量に頼らざるを得ないところがあり、チームティーチングの形をとっている。それ以外の音楽や図工といった教科は、級外職員が分担している。生活科はもともと学年全体で取り組んでいることも多い。

教　頭：学校評価についてお願いしたい。前年度まで「学校評価アンケート」としていたが、委員から「学校評価」とすべきだとのご意見をいただいたので修正した。（このほか、昨年度から変更のあった項目について、その意図などについての説明が為され、了承された。）
Ｃ　氏：このヤングケアラーに関する質問項目だが、分かりづらいものがあるように感じるが？
教　頭：この項目は、県教委からの調査項目に沿っている。学校評価とは直接の関係はないが、時期的に同時に質問した方がよいと判断して加えている。そのため、項目はそのままにしてある。
Ａ　氏：全国的にヤングケアラーの問題が顕著になってきて、国会で質問が出ると文科省から県教委、県教委から市教委、市教委から学校と調査が降りてくる。質問も項目数ばかりが多く、子どもにとっては答えにくいものもある。先生方もただやらせるわけにはいかないから準備が必要となるし、教員の働き方改革と言っておきながら、こんなのやるなよと言いたいところだ。

教　頭：（今年度の夢・志チャレンジスクールの計画・予算について説明が為された）
Ａ　氏：大きな取組内容が年度前に分かっていれば尚更よいだろう。ここは夢チャレ、ここは後援会、これは保護者負担にせざるを得ない…と年度前に算段が立てられるからね。市から補助が出ていることは有難いのだが、これでも足りないというのが実態だろう。地域には独自予算もあるのだが、学校だけを支援することは難しくなっている。それでも何とかしたいとは思っているから、ヒアリングの際に伝えてほしい。
教　頭：予算ごとの細かな使途は分かっているが、それをひとまとめにした資料はないと思う。それがあれば、次年度以降の検討もし易いということだと承った。準備していきたい。

教　頭：資料にＰＴＡ広報紙「ＳＭＩＬＥありた」があるが、委員の皆さんにお配りいただきたいとのことだった。
Ｄ　氏：このＰＴＡ広報紙だが、教養文化部で相談して、役員と先生方の負担を考えると共に、内容を濃くしたものを今年はＩ回発行するとのことだ。ご理解いただきたい。
教　頭：スクールバスのルールやマナーに関する資料もお配りした。有田小創校６年目を迎えるのだが、明確なルールやマナーというものはなかった。もちろん、一般的な指導はしてきたが、これも整えていく必要があると考え、板倉小のものを参考にルールは作成した。マナーは子どもたちが覚えやすいものをと考えて調べ、「う・さ・ぎ」とした。
ルールやマナーについては、指導を続けていけばよいのだが、困っていることもある。それは、バスの乗り降りについてで、子どもたちが確実にバスに乗り降りしているかを把握することが難しい。運転手や職員が確実に把握するにはどうしたらよいのかと悩んでいる状況だ。本会議

の冒頭にも放送でバスの出発に関する呼び掛けをお聞きになったと思うが、現状は、担任からの声掛けと放送での呼び掛けを行っている。また、乗り遅れてしまった際には、確実に職員が送り届けることにしている。今のところは大きな事故などは起きていないが…。

Ｃ　氏：一番の問題は、子どもたちがすぐにバスに乗らない、定時に集まらないということか？

教　頭：子どもがというよりは、先生方も含めて遅れがち。では、１５時発でなく、１５時１０分発にしたならば…やはりギリギリになるのだろうと。先生方には発車時刻に間に合うように教室を出してください、子どもたちにはバスを待たせられないから皆で行くよ、と声掛けはしているけれども、システマチックかと言えばそうではない。

Ｃ　氏：小さな子は別として、逆算して行動したり、考えたりすることができるようになってほしいところだ。

教　頭：安全に子どもたちを下校させたいと願い、担当の主幹教諭が一生懸命声掛けしたり放送したりするのだが、誰が乗って誰が乗らない…ということは刻々と変わっていくので把握しきれない。

Ｂ　氏：学童保育に行く子どもも多く、混雑もしている。

Ａ　氏：私が危惧するのは、バスへの置き去り事故などが起きるが、なぜ発生するかと考えるというと誰が乗っているかが分かっていないということが理由にあると思うからだ。万一事故が起きた場合、何人乗っていたのか？誰が乗っていたのか？それらが分からないというのは上手くないのだろうと思う。ただし、これは学校の問題というよりは、運行する側の問題であるとは思う。それでも、何かあったときには「管理責任はどうなっているのだ」と実態もよく知らない人が必ず言ってくるところでもある。「学校に来ている、来ていない。」ではなく、「バスに乗っている、乗っていない。」であっても…。

Ｃ　氏：そのバスに乗っている子どもの名簿一覧があると思っていたが、それが無いとなると…。

Ａ　氏：それを導入するとなったとき、本来であれば運行するバス会社がやるべきことなのだろうが、契約云々でできないとなると先生方にその仕事が行く。そうするとそれはかなりの負担となるだろう。担当の先生がバスに乗る子を全員確認する…それこそ本来の業務ではないことをやることになる。

Ｂ　氏：難しいことだ。以前、突風の予報が発せられて子どもたちの下校を見守ってほしいという内容のＦＡＸが町内会長宛に来たことがある。そこで自分が見守りに行ったのだが、ＰＴＡメールで保護者にも伝わっているので迎えも次々と来る。同じ町内の子どもたちを集めたが揃わない。あの子は母親が連れて行ったよとか、待っている間に親が迎えに来て引き渡すとか。６００人を超える有田の子どもたちが波のように一斉に下校する中の作業ではあったが、１０人を把握することでさえ困難だった。状況は異なるが、下校する子ども一人一人を把握するのは先生方大変だろうなと想像がつく。

バスも同じで、同じようなことが頻発すると出発時刻が遅れてしまうだろうことも予想が付く。朝のバスも遅れて到着することがあるが、お子さんの事情によって変化することも分かるのでこれは大変だなと見ている。

Ｃ　氏：まず、乗車するレギュラーは分かっているのだろうか？あと、誰が「乗る・乗らない」を申請し、誰が申請を受け取って、誰が「乗った・乗らなかった」かを確認する…そういう役割分担や、変更時の対応とかが定まっていると良いのだろうが、何か良い案はないのだろうか？

教　頭：願いとしては、その時、その場で分かればよいということになる。Ｂ　氏のご指摘どおりで、刻一刻と状況が変わっていくので把握ができない。

Ｂ　氏：家族の都合でいきなりいなくなる…ということは実際にあるのではないか？

教　頭：学童保育ではあった。学校の玄関からクラブの玄関までの間で保護者が待っていて、そのまま連れて帰り、後からクラブに来ていないと連絡があり慌てて確認したことがある。バスの場合、迎えに来ますとの連絡をいただければ、地域連携室で職員と一緒に待つようにしているのだが、結局のところ紙と電話でしかやり取りができていないのは同じなので、危うさはある。昨年度まではベテランの運転手、それこそ、子どもの顔も一人一人を覚えている方であったが、退職されたのでより難しくなった。

Ｃ　氏：いずれにしても、名簿などを基に誰が乗っているかを確認することはできていないと。

教　頭：実態としてはそうなる。運転手は安全な運航に集中されるので、人員点呼までは…。

Ａ　氏：問題は帰りか？

教　頭：行きは保護者が乗せるので、遅れた場合、基本的には欠席や遅刻の連絡がある。

Ｅ　氏：レギュラーは決まっているということであれば、タブレットに名簿を作って乗車時、降車時に本人に押してもらえばよいのではないか？

Ｃ　氏：保育園の送迎のシステムに似ているものがある。そういうものがあるのかなと…。

Ａ　氏：それはそうなのだが、保護者の都合で乗らない…というのは基本、連絡帳でくる。そうすると、それを集約して一覧を作ることになる。１０人程度しか乗らないならできるだろうが、有田小では難しいだろう。それを把握し、一覧をつくり、電話での急な変更に対応するというのは…。最初から乗らないということが分かっている名簿を作成できれば、実際は乗っていない子どもはどうなったのだと確認できるのだが…。その、最初から乗らないということが分かっている名簿を作成すること自体、事務量が多い。あと、子どもたちの顔が分かるベテラン運転手でも、誰が乗ったかは分かっても、誰が乗らないかまでは分からない。

Ｂ　氏：その通りで、これは大変に難しい問題だ。

Ａ　氏：まずは話題となっていることが大切だろう。話題になった上でなかなか難しいぞというのと、話題にもならず放ったらかしとでは随分と違う。上手い方策は見付からないが…市教委は管内に多くのスクールバスを運行しているわけだし、どうだろうね。

Ｃ　氏：ｉＰａｄを使って、うまく乗り越えたところとかがあれば教えてもらいたいものだ。

Ｂ　氏：なお、運転手は１便・２便ともに、到着後、確実に座席をチェックすると共に忘れものも確認してくださり、報告をされている。

教　頭：委員の皆様には、学校としても理想としている状態と異なり、困っているということをご承知おきいただき、良い案やご意見があったら教えていただければ幸いだ。

校　長：教員の働き方改革に関連してお願いしたい。教員の時間外勤務が非常に多く、病気になったり、辞職したりする教員も非常に多く、改革していかなくてはならない状況だということが、既に全国的な話題となっていることは委員の皆様もご存知のとおりであり、加えて、教員の環境がブラックだということで成り手もいない状況でもある。当校では、校務についてはかなり精選されてきているが、今後もさらに継続していきたい。だが、現状として８０ｈ、１００ｈ超え

の職員も多くて、２２時、２３時になっても学校に残っている職員もいる。職員の健康状態を考えて早く帰るようにとは伝えても、子どもの数も多いことからやるべきことも多く、教員の矜持としてやりたいことも多く、また、子どもの数が多くなれば、それだけ心配されて連絡を取りたいという保護者の方も多く、遅くまで勤務する教員も多くなっていることを皆様方にはご承知おきいただきたい。あわせて、「アフターコロナ」となり学校行事についても、子どもにとってより良い活動や保護者の皆様方にぜひ見ていただきたい活動、一緒に取り組んだ方が教育効果も高いという内容は戻していきたいが、盛大にやっていくばかりでは先に述べた働き方改革にはつながらない。教育効果を最大限に上げることを目指すとともに、子どもたちにも先生方にもできるだけ負担を掛けないで、有効な学校行事にしていきたいと考えており、委員の皆様方やＰＴＡの皆様方のお知恵とご理解とご協力をお願いしたい。

校　長：最後に、当校の教育観について話をさせていただきたい。とにかく先生が子どものための全てをしなくてはならないという発想は変えるべきだと考えている。例えば、宿題などの〇付けは先生がその全てを行わなくてはならないとか、学校で起こっていること全てを先生が把握して答えられなくてはならないとか…。そうではなく、本当に子どもたちに育てなくてはならないのは、「自分ができているのか、できていないかが自分で分かること」だ。中学校や高校ともなれば、自分でできなければ困ることばかりである。「自分で自分が学んでいく力」を高めていかなくてはならない。「学校の先生に全部やってもらわなくては困る」ではなく、だんだんと成長に伴って自立して学ぶことができる、他人とも上手に関わっていける子にしていきたい。また、徐々に主体性が育っていかなくては困るわけで、いつまでも「言われることだけを聞く子ども」から、最終的には独り立ちできるようになっていくことを願っている。このあたりの教育観のずれから、保護者から「学校がもっとしっかりと面倒を見るべき」という意見をいただく可能性もあるが、ご理解をいただければと思う。

５　その他

Ｆ　氏：我が町内はもともと３０世帯程度しかない集落だった。それが今や２０００人を超えている。
　　それだけに、地域の歴史なども知ってもらえればなと思う。

Ａ　氏：以前、町内会長に雪囲いのお願いが来た。また、教育を語る会のお話など、早め早めに連絡をいただけるとよい。そうすると、いろいろな形での協力ができるようになる。事前に学校運営協議会の了承を取っておいて、先に出すとよいと思う。

Ｄ　氏：上越市Ｐ連の水遊びイベントが有田小グラウンドで開催される。想定以上の申し込みとなっており、ご迷惑をお掛けするかもしれないがご理解とご協力をお願いしたい。

６　閉会のあいさつ（副会長）　略

＊本議事録は発言の趣旨をまとめたものであり、発言そのものを記録したものではありません。